久留米入城400年 ARIMA

歴史をふりかえり、これからの１００年に活かす

久留米入城４００年のこれから

4

００年前の有馬豊氏（ありまとようじ）久留米入城から、明治維新を迎えるまで、約２５０年間続いた久留米藩の時代。この間に整備された都市や交通、創始された産業や文化は、現代にも受け継がれ、暮らしの中に息づいています。この４００年という節目は、様々な分野や視点から歴史を振り返り、そして「これからの１００年」のヒントを探し出す好機（チャンス）ではないでしょうか。

1 江戸時代に築かれた久留米の礎（いしずえ）

令和２年10月に開始した「久留米入城４００年モノ語り」も、今回が最終回です。これまでのＷｅｂ連載でも、久留米藩の時代に築かれた、さまざまな〝**久留米の礎**〟を紹介してきました。

現在の都市・久留米は、江戸時代の**久留米城とその城下町**を基礎にして発展してきました（第２・３・10・11回）。現代の生活基盤として重要な幹線道路は、かつての街道筋にあたります（第９回）。

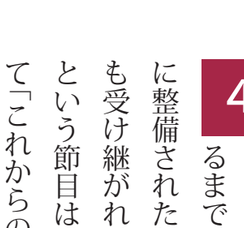
城島の酒や瓦の製造は、江戸時代に興りました。**久留米絣**（かすり）は藩の産業としても奨励され、その伝統の技は**国の重要無形文化財**に指定されています（第12回）。

筑後川とともに生きる人々の長い歴史の中で、**治水事業**が体系的に取り組まれるようになったのは、久留米藩の時代のことでした（第８回後編）。また、筑後川の**利水**は、村の人々の思いが藩をあげての事業に結実し、現在の豊かに広がる田園風景を形づくりました（第８回前編）。

この他にも、**県立明善高校**は藩校の明善堂を前身とし、**「医者のまち久留米」**のルーツを辿れば藩の医学館に至ります。

国指定の重要文化財であり、名所としても名が挙がる**梅林寺の「有馬家霊屋」**（たまや）や、**高良大社の「本殿、幣殿**（へいでん）**、拝殿**（はいでん）**、大鳥居**（おおとりい）**」**は、当時の技術の粋を集めて建立され、その時々の修理や地域の保全活動などによって、守り伝えられてきました。

久留米藩の時代に築かれた礎は、都市、交通、産業、学問など多岐にわたり、連綿と受け継がれ、今日の暮らしのなかに息づいています。



2 これからの100年へ

４００年という節目は、１００年単位で過去や未来について考える好機です。モノ（文化財）から歴史を語る連載の最終回では、文化財を中心に、〝これまで〟と〝これから〟について語ってみることにします。

・今から100年前・・・

大正10年（１９２１）５月９日、**久留米城本丸跡**をメイン会場に、有馬豊氏の入城３００記念祭が行われました。祭典の次第や記念品などが**久留米市文化財収蔵資料**として伝わります。それによると、旧久留米藩領の市町村、経済・金融団体、地域が協力・連携して、演舞や大名行列、展覧会など、さまざまな行事が催されたことが分かります。

すでに廃藩置県から50年余りが経っていました。この間、旧藩主家は東京へ移り、久留米城の建物は次第に解体され、堀の大半は埋められていきました。藩の記憶を持つ人々はいたものの、江戸時代は遠くなりつつありました。

・文化財保護のこれまで

ちょうどその頃、明治時代後半から大正時代にかけて、文化財保護法の前身となる法整備が進められます。幕末以来の動乱と社会変動によって古社寺や旧家が危機に直面し、その貴重な品々を保護することが、近代国家としての急務となったのです。

久留米市では、「史蹟名勝天然紀念物保存法」によって、**日輪寺古墳**（にちりんじこふん）（京町）や**カササギ生息地**（荒木町、大善寺町、安武町、三潴町、城島町）が国の指定を受けました。

戦後、国の文化財保護法制定に伴い、県や市町村でも条例が制定され、それぞれ重要な文化財の指定が行われるようになりました。

たとえば、**久留米城跡**は昭和58年（１９８３）に県指定史跡に、市内で唯一の武家屋敷である**坂本繁二郎生家**は平成15年（２００３）に市の有形文化財に指定されています。

また久留米市では、平成元年（１９８９）、初めて久留米城下町跡の本格的な調査に着手します。当時まだ、全国でも江戸時代の城下町を対象とした**発掘調査**は少なく、その成果は大きなニュースとなりました。それから30年余り、発掘調査の成果と、**古絵図や古文書などの歴史資料**をあわせて分析することで、次第に久留米城下町の成り立ちや人々の暮らしが明らかになってきています。

これまで残されてきた文化財を、**調査**し、**保存**し、さまざまな視点から考え、また**活用**することが、新たな知見を得たり、歴史をより深く理解したりすることにつながります。

3 これからの100年をはじめる

歴史は、政治や経済、社会構造などの大きな流れを背景として踏まえながら、その時代を生きた「誰」の視点で出来事を捉えるかによって、大きく見え方が変わってきます。言い換えれば、同じ時代の同じ出来事に対しても、視点によっていくつもの異なるストーリーが存在するということです。

このシリーズが対象とした〝**江戸時代の久留米**〟についても、紹介したいくつかの「モノ語り」以外に、数多くの多様なストーリーが存在します。

地域の歴史を現代に活かし、未来へとつないでいくためには、身近にある歴史的なモノに目を向け、考えてみることが大切です。

・見つけ守り、活かし伝える

久留米の先人たちが残した足跡は、今も私たちが暮らす市内のいたる所に広がっています。それは過去の産物というだけではなく、私たちが生きる時代につながる大切なものです。いま何気なく使っている言葉や、いつも通る道路、食べ物や風景など、日常にあふれているものは、先人たちから受け継いできたものです。

久留米市では、市民一人ひとりが大切にしたい、残していきたいと思うモノ・コトを歴史遺産と位置付け、「見つけ守り、活かし伝える」ための取組を始めました。**「久留米市文化財保存活用地域計画」**は、その基本となる計画で、福岡県で初めて国の認定を受けました。計画には、市民や地域、事業者、関係団体、行政などが協働して歴史遺産を守り、活かしていく取組を示しています。

・筑後川遺産による保存・活用

計画に基づく新たな仕組みとして**「筑後川遺産」**の登録制度があります。久留米市では筑後川の恩恵を受け、数多くの歴史ストーリー（物語）がつむがれてきました。「筑後川遺産」とは、その歴史ストーリーによって結ばれた歴史遺産群のことです。「筑後川遺産」に登録することで、関連する歴史遺産を保存・活用していくことを目的としています。

・さまざまな取組を未来へ

「久留米入城４００年」も久留米固有の歴史ストーリーです。

令和３年度は、六ツ門図書館展示コーナー及び有馬記念館での企画展や、歴史のまち久留米ストーリーシート「有馬の城づくり、町づくり」の発行・配布などによって、現代の久留米市街地で、江戸時代の久留米を感じてもらう取組を進めてきました。このシリーズのほか、京町校区の広報紙で、久留米藩時代にまつわる地元の文化財紹介を連載したり、市内事業者と協力して関連商品を開発したりするなど、情報発信に取り組み、「久留米入城４００年」の周知を図りました。

これらは、単に記念イベントとしてではなく、新たな１００年のスタートとして、今後さまざまな角度から、多様な歴史ストーリーを発信していく端緒となるものです。

すでに、これからの１００年は始まっています。大名有馬家の菩提寺・梅林寺（京町）や祈願寺・福聚寺（合川町）では、文化財の調査や整理を進めています。また、寺宝として大切に保存し、後世に伝えていくため、**曝涼**（ばくりょう）**（虫干し）**が行われ、梅林寺ではその様子も公開されました。

久留米藩初代藩主・有馬豊氏の久留米入城からの４００年を見つめ直すことで、私たちが築いていく久留米市の未来を考えるきっかけになればと思っています。

令和３年12月１日
◆発行／久留米市教育委員会
◆問合せ／久留米市市民文化部文化財保護課
TEL：0942（30）9322
FAX：0942（30）9714
E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp